



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第 4 主日 B 年 (2024 年 1 月 28 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：申命記 18 章 15 — 20 節

第二朗読：コリントの信徒への手紙一 7 章 32 — 35 節

福音朗読：マルコによる福音書 1 章 21 — 28 節

イエスさまの宣教

三つの朗読から

第一朗読に「わたしの言葉を語る」(19 節) とあるように預言者は神から言葉を預かり、それを人々に伝えます。

第二朗読の最後、「ひたすら主に仕えさせる」(35 節) とは、父なる神がイエスさまに託した使命でもあります。

福音朗読でイエスさまは「権威ある新しい教え」(27 節) を語ります。言葉を預かる預言者とは異なり、イエスさまはご自身の心から湧き出るものを、ご自身の言葉で語るのです。

説教：イエスさまの宣教

いよいよ、イエスさまの宣教活動が始まります。シモンとアンデレ、さらにはヤコブとヨハネをお弟子さんとして召し出したイエスさまは、彼らと一緒にガリラヤ湖畔を北上して、カファルナウムの町に入ります。ここが、ガリラヤでのイエスさまの宣教の拠点となります。

福音書をよく読んでみると、「一行はカファルナウムに着いた」(21 節) から、「夕方になって日が沈むと」(32 節) を経て、「朝早くまだ暗いうちに」(35 節) とあるところから、1 章 21 節から 34 節までは、イエスさまとお弟子さんたちの一日の出来事であったことがわかります。場所は同じカファルナウムの町ですが、それぞれ場面が違います。今日の朗読箇所は会堂の場面です。

その後、イエスさま一行はシモンとアンデレの家に入ります(29 – 31 節)。場面は家の中です。そして夕方になって日が沈んでもなお、「町中の人々が戸口に集まっ」(33 節) できましたとありますので、ここでの場面は街角です。会堂という公の祈りの場所、家の中というプライベートな生活の場所、そして街角という公の生活の場所でイエスさまは宣教活動を行います。一日の出来事に集約して記されていますが、実はイエスさまの宣教活動、とりわけ癒やしの行為はどこでもなされていたことがわかります。21 節から 34 節はイエスさまたちによる宣教の典型的な様子を描いています。

今日の朗読箇所を目を向けてみると、文章の構成、構造が見えてきます。イエスさま一行は会堂に入る(21 節) から始まって、出来事があって、会堂を出て行きます(29 節)。その間に、イエスさまは教えはじめ(21 節)、人々はその教えに驚きます(22 節)。なぜなら権威のある者として教えたからです(同)。朗読の後半でも、人々は驚きます(27 節)。なぜなら権威ある新しい教えだからです(同)。イエスさまの教えと人々の驚きの間に挟まれて、汚れた霊を追い出す物語があります(24 – 26 節)。

23 節の「汚れた霊」は悪霊と同じ意味だと考えてよいでしょう。当時は、人に汚れた霊が取り憑くと、その人には狂気が生まれると考えていました。そして汚れた霊が出て行くと正気に戻るとも考えていました。イエスさまの宣教活動には、狂気から正気への回復があります。現代人のわたしたちにとって汚れた霊に取りつかれた人とは、何かに取り憑かれたように「我を失った」人と理解したらよいかと思います。

汚れた霊、あるいは悪霊の追放の奇跡は、古代世界ではよく見られた現象だそうです。そして、それを伝える物語も、ある一定のパターンにそって書かれているそうです。今日の福音でもそういったパターンが読めます。

- ①悪霊は霊能者に気がついて、相手の名を呼ぶ。こうして相手を支配し、自己防衛を図る(23 – 24 節)。
- ②霊能者は悪霊に沈黙を命じる(25 節)。
- ③悪霊が追放される(26 節)。
- ④目撃者が驚く(27 節)。

イエスさまは古代オリエント世界に多くいた霊能者の一人ではありません。「権威ある新しい教え」を語ることで、神の国が到来したことを告げるのです。汚れた霊を追い出す行為は、神の国が具体的に実現したことのしるしとなります。イエスさまは他の霊能者とは違って「『黙れ。この人から出て行け』とお叱りに」(25 節) となります。得体の知れない魔術的なものに頼らずに、言葉に頼って、言葉によって人を解放なさるのです。